

## 金沢柵推定地金沢城跡南東尾根部現地説明会資料

### 1. 調査の概要

**遺跡名**：金沢城跡（かねざわじょうあと） **所在地**：横手市金沢中野字金洗沢地内  
**調査期間**：令和元年6月17日～12月上旬予定  
**調査対象面積（測量調査面積）**：約1,750 m<sup>2</sup> **調査面積**：約120 m<sup>2</sup>  
**調査原因**：後三年合戦関連遺跡事業に伴う金沢城跡第11次調査  
**調査指導**：後三年合戦関連遺跡整備指導委員会・後三年合戦史跡検討会・  
文化庁文化財第二課・秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室  
**調査機関**：横手市教育委員会教育総務部文化財保護課

### 2. 遺跡の概要とこれまでの調査成果【金沢柵推定地金沢城跡と陣館遺跡参照】

金沢城跡は、JR奥羽本線後三年駅から東北東3.5kmに位置し、奥羽山脈が盆地にせり出した丘陵上に立地します。その裾野は東側に金沢城跡西麓部、西側に陣館遺跡があり、その間を羽州街道が南北に延びています。

金沢城跡の調査は、『後三年合戦絵詞』などに描かれている金沢柵を金沢城跡と陣館遺跡と想定し、進めてきました。最初に調査を行った陣館遺跡は、調査成果から清原氏に関わる遺跡として平成29年10月に国の史跡に指定されました。しかし、この場所は金沢柵としては狭く、金沢柵の中の寺院空間ではないかと考えるようになりました。そこで、再度、金沢城跡の内容を把握する必要性がありました。遺跡面積は約200,000 m<sup>2</sup>と広大です。調査前までには、城の地形測量や踏査による縄張り図を作成し、過去の調査資料（遺物）を検討してから調査を行い、少ない調査で最大の成果を上げることを目的とし、平成27年より発掘調査を開始しました。

調査の結果、尾根上に広がる金沢城跡は中世の城跡であり、15世紀後半には現在目視される景観が構築され、17世紀初頭までは継続して利用されていたことが明らかになりました。貿易陶磁器や国産陶器などの優品な遺物が多々あり、文献で示されるように14世紀後半に南部氏が金沢城を構築し、15世紀後半以降に小野寺氏が、本丸・二の丸・北の丸を大改造したことも考えられるようになりました。いずれにしても金沢城跡は、当地域を代表する城であることは間違いなく、国指定史跡になってもおかしくはないと思われまます。

尾根上に広がる金沢城では、中世後期に大幅な城改築が行われているため、金沢柵について確認することが難しいとの結論に至っていますが、今回調査した南東尾根部は古代の可能性があることから、内容確認調査を実施することとなりました。

### 3. 調査目的

この場所は、標高の高い金沢城跡の南東尾根部にあり、平坦な尾根を土塁と堀で区画し、平坦部には竪穴状遺構が数基目視することができました。このような遺構は、北東北（北緯40度以北）では、防御性（囲郭）集落とも呼ばれ、10世紀後半～11世紀の後三年合戦の時代に多いとされます。今回の調査は、この場所の遺構内容を確認し、金沢城跡の各時代の場の使われ方を把握することを目的としました。この場所を調査すれば、金沢城跡の山城部分については、ほぼ調査を実施したことになります。

### 4. 調査の結果（11月9日現在）

**検出遺構**：竪穴建物跡7棟（調査は2軒）・土塁跡5条・堀跡6条・土橋跡3条・道路跡1条・段状地形2条  
**出土遺物**：鉄製品破片2点

### 5. みどころ【南東尾根部遺構配置図参照】

●みどころ1（南東尾根部全体を見渡す）⇒遺構配置図を見ていただきますと、北が上になります。西側は現代道路が南北に延びていますが、この部分は遺跡が掘削されています。東側はやや内に窪んでいることから、この南東尾根部は、南北に長い痩せ尾根で、ひょうたん型の自然地形であったのでしょうか。南北75m、東西最

大25mの範囲で、尾根裾野には堀（水色）を掘って、谷側に土塁（茶色）を構築しています。堀は全周している訳ではなく、4カ所途切れており、黄色部分は土橋、白い部分は急斜面でした。北側と南側の土塁は非常に規模の大きいものです。北側には、中世金沢城跡の五重の堀切が存在し、その奥に本丸があります。堀の内側は、北側頂上部には南北15m、東西5mの長方形の平場（黄緑）があり、斜面には二段の段状地形が確認されます。南側には、尾根にそって堅穴建物跡が並んで配置されています。

●**みどころ2（痩せ尾根の両側に並ぶ堅穴建物跡）** ⇒黄緑の頂上平場から南側を向くと痩せ尾根の東側には規模の大きい2軒の堅穴建物跡と、西側には比較的小さい5軒の堅穴建物跡（堅穴状遺構）が並立しています（赤色）。東側の堅穴建物跡（SI01とSI02）はほぼ同じ大きさで、南北方向に長く、長軸5.5m、短軸4.0mほどの長方形をしています。谷側をよく見てみると円形に土盛りされています。これは痩せ尾根であったために、尾根頂上部を削り、広い空間を確保してから建物を建てたと思われます。建物の南北方向には土盛りがあり、堅穴を掘るために掻き出した土の高まりかもしれません。建物の谷側は堅穴状にはなっていませんが、その他の三方の壁は段を形成しています。その段の平坦面には柱穴らしき跡も確認できます。床面にはあまり柱穴が規則的に並んでいないことから、この段には上屋構造を支えるための柱が配置されていた可能性もあります。この建物にはカマドが付されていませんでした。SI01 堅穴建物跡では出入口らしきものが尾根側で確認されていますが、SI02 堅穴建物跡では、良くわかりませんでした。遺物は、SI01 堅穴建物跡の床面から鉄製品2点が出土しましたが、その他は何もありませんでした。生活の匂いがしない状況です。

●**みどころ3（南側の大規模な土塁と堀）** ⇒調査前は、この土塁が大規模な構造であることから中世の可能性も指摘されました。T1 試掘溝付近では、尾根頂上平坦面から土塁上面の幅が約7mあります。堀跡の断面は、薬研堀を呈しています。確認面からの深さは1.3m、土塁上面からは2.1m、尾根平坦面からは3.0mあることから、非常に強固な造りといえます。T1の堀跡は、人為堆積で埋められており、土塁の上面を削って埋めたことが考えられることから、土塁はもっと大きかったものと推測されます。その後、黒色土の自然堆積を経て、灰褐色土が上層に堆積していますが、この在り方は堅穴建物跡の堆積状況と類似することから、廃棄時期が同時の可能性も考えられます。

●**みどころ4（直線的な道路によって埋められた土塁と堀）** ⇒東側のT3 試掘溝付近は、後世に造られたとみられる幅2~3mの道路跡（青色）が尾根頂上平坦面へと延びています。道路跡の南側は土塁跡と堀跡が確認できますが、北側は道路を造るために、大量の土盛りがなされ、土塁と堀が地表面では確認できない状況でした。この道路跡は直線的であり、自然地形というより人工的であり、中世以降の構築と考えられます。SI01、02 堅穴建物跡の谷側斜面では、北側の斜面で見られた段状地形がなく、直線的な斜面であるため、道路を作るために削り取られた可能性が高いと思われます。T3 試掘溝の断面を観察すると、上層は道路跡で、幅2m、深さ0.8mで人為堆積しています。その下層にも黒色層の道路跡が確認できます。さらにその下層には、南側の土塁跡や堀跡と同規模とみられる遺構が確認されました。

●**みどころ5（大規模な土木工事の跡）** ⇒東側のT3 試掘溝の北側にT4 試掘溝を設定しました。表土を取り除いたところ、黒色土の堆積が途切れたことから、南側には土橋があることが確認されました。またこの黒色層の高さはT3 試掘溝跡とほぼ同じであったことから同時期の構築と考えられます。土塁上には、直径20cmほど柱穴が南北方向に配置されていたことから柵の可能性もあるかもしれません。土塁の下層は盛土の層が厚く堆積し、その下層からも堀が確認されました。ここでも柱穴を確認しており、2時期以上の大規模な造成工事があったことが確認されました。

## 6. 最後に

これら遺構の時期については、出土遺物が全くないため、年代決定をすることは容易ではありません。金沢城跡西の丸の調査においては、盛土の中から、中世遺物がよく出土するのですが、今回は全くありませんでした。道路跡が中世であったなら、その下層の堀跡に堆積する黒色土は、しばらくの間、開口して堆積したものと考えられることから、中世以前つまり古代の可能性もあります。金沢城跡の中心から離れる南東部で、生活感の全くない場所で、大規模な土塁と堀を構築するということは、無駄な事業のようにも思えますが、それほどの労働力を動員できた集団であることは間違いないようです。また堀を一気に埋めていることから、この場所が放棄された可能性も高いと思われます。遺跡の鬼門にあたる場所であるから、何か金沢柵に関係があるのでしょうか。大鳥井山遺跡の北部地区の堀跡とも類似することから、今後慎重に検討していきます。